

白蓮塚の碑と常福寺

那珂市歴史民俗資料館

常福寺の楼門・山門を出て旧街道を横切り、小道を西へ進んでいくと少し低地になります(この道は「水戸街道」と称されています)。その北側、人家の間にある細道の奥にこの碑は立っています。碑文は、常福寺第39世靈譽らんしゆく鸞宿が誌したもので、寛保2年(1742)の夏のこと。その内容はおおよそ次のようです。

浄土宗を常陸国に広めた佐竹氏一族の蓮勝れんしょう、その弟子でありやがて常福寺の開祖となる了実上人りょうじつ。了実は、諸国布教の旅から常陸国に帰り、落ち着いて布教できる土地を求めようと村松むくそうの虚空蔵堂こくぞうに籠こもって祈った。ある晩、「ここから西の方向、草莽そうもう(くさむら)の際に白蓮が一茎生えている。そこが教えを説くのによい縁のある所である。早く行って説くがよい。」と夢のお告げがあった。喜んだ了実は、早速周辺を訪ね歩き、ついにこの地に来て香り高く咲いている蓮華を見出した。了実は、謹んで靈告に敬服し、荒れ草を刈り、寺院を建立して草地山蓮華院常福寺と名付け蓮の生えていた場所へ一つの塚を築き、白蓮塚とした。実にこれ延文3年(1358)のことである。それよりおよそ400年後、星移り景色も変わり当時の面影はほとんど失われようとしている。このため、子孫である自分靈譽が新たに一石基を塚上に建て、了実の考えが広まり、人々の善行が普及することを期待する。

しかし、『瓜連町史』では、「常福寺は了実が佐竹氏の承認と保護を受けて久慈郡佐都郷常福寺(常陸太田市)に建立したのが最初であり、その後、了実がこの白蓮の地に移転した。それは、楠木正家が瓜連城から退却し、替わって佐竹義篤が瓜連の地を領した延元元年(1336)以降のことである。その白蓮地常福寺は、嘉慶2年(1388)の瓜連大火の際に焼失し、応永12年(1405)になって瓜連城跡内に新たに再建され現在に至っている。」としています。(その後、応永23年(1416)にも常福寺は上杉禅秀の乱の戦火により焼失している。)

ここには、厳しい修行を重ねて仏法・法統を継承し、人々に心の安らぎと善行を勧め、世の平安を実現しようとする常福寺列聖の熱意が込められています。

なお、瓜連の綿引家先祖書によると、瓜連城は、下野国(栃木県)栃木から来往した宇都宮氏の家臣田原氏が承元2年(1208)に築城した。田原氏はさらに後を追ってやって来た33人の家臣たちと共に城を保ったが、その間に田原氏は「綿引」と改姓している。その後、建武中興が成り楠木正家が入城して城の拡張を行ない、綿引氏はその家臣となった。ただし、瓜連は正家入城前に北条宗領(嫡男の領地)となり、北条時頼の5男桜田禅師時厳やその子貞時が城主となって城を改修している(『瓜連町史』)。延元元年(1336)楠木正家が佐竹貞義に敗れて奥州へ逃れた後、城跡はまもなく廃城となり、その跡へ常福寺が再建されたこととなります。

